

二〇〇六年八月二日

タナトロジー研究会

静岡大学

竹之内裕文

一 「死」はいかに語られるか 人間の生における「死」の現われをめぐって

子どもに「死」を伝えるべきか

身内の者の死に際して、その死を子どもに伝えるべきかどうか。それは、大人にとっても、子どもにとっても、切なくつらい問いである。

たとえば、大好きだった「おばあちゃん」の死。その関係が深ければ深いほど、伝えにくくなる。伝えない方がよいと思えてくる。

大人だって耐えられないのに、子どもに伝えて大丈夫か。ショックが強すぎるし、つらい思いはさせたくない。知らない方がよいではないか。まだ死が理解できないのだから、よけいな不安を与えない方がよいだろう……。

そうも思うのだけれど、本当にそうか。

子どもの側からみると、どうなのか。たとえば、ある方は、お父さんを亡くした経験を振り返って、こんなことを書いている。

父は、私が小学校の時に病死した。その日、いつもの見舞いのつもりで病院に行った私は、病室に入れてもらえず、廊下に長い間待たされた後、父が死んだことを告げられた。私は、事態を疑うこともせず命じられるままボーツとしていた自分に腹をたて、父が最後に自分に会いたいといってくれなかったことに傷つき、子どもというのはそれほど軽い存在でしかないのかと絶望し、父が生死をさまよっている時に私が耳もとで呼んだら、父はこの世に引き返ってきてくれたかもしれないのになどと考えて、スタスタになった。(西平直「デス・エデュケーションとは何か」、『死生学 入門』所収、ナカニシヤ出版)

子どもにとっての「死」

たとえば、幼稚園の子どもにとって、死は「もう会えなくなる」と同じだという。そこで遠方に引越してもう会えないのと、死んでしまってもう会えないとの違いが、よく理解できないう。

そんな話を聞くと、私たちは、かわいいものだと思うのだが、では、その違いをどうやって言葉で説明できるか。親の転勤に連れられて、もう帰ってくる可能性がない大の仲よしの「ナオちゃん」を見送りながら、また会えるの、帰ってこないの。その質問にどう答えるか。

引越してもまだ生きているけど、死んだらもう生きていない。それで何かを説明したことになるのだろうか。(同論文)

二 脳死・臓器移植と「新しい死の定義」

脳死状態とは

脳死状態とは、脳全体の働きがとだえ、けっして元に戻らないことをいう。全脳の不可逆的な機能停止と定義される。混同されがちな植物状態と比較しながら、やや詳しくみてみよう。

人間の脳は、大脳、小脳、脳幹の三つの部分からなり、それぞれ重要な役割を担っている。大脳は思考や意識や感覚などを、小脳は運動や平衡などを、脳幹は心拍や呼吸や体温調節など生命活動一般を、それぞれ統御する最高中枢とみなされている。

植物状態とは、これら脳の三部分のうち大脳と小脳とが完全に機能停止した状態、もしくは著しく機能低下した状態をいう。それゆえ、重度の場合には、体動が一切なく意識も不明である。軽度の場合には、体動があり声も発するが、意味ある行為になっていないとされる。ただし、脳幹が機能しているため、食物や栄養分・水分を与えれば長らく生きていける。

対して脳死とは、大脳と小脳に加えて、脳幹までもが不可逆的に機能を失った状態である。したがって、人工呼吸器の力を借りて呼吸機能を確保し、心臓の自動作用によって心拍もあるが、ほぼ数日間で心停止をきたし、確実に死ぬ状態とされる。こうした脳死状態は、交通事故や蜘蛛膜下出血などの発作によって生じる。

以上は一般的な定義に類するものだが、注意を要することがある。まず、重度の植物状態の者には意識や感覚がないとされるが、外部からの観察でそう断定しているにすぎない可能性がある。「意識不明」という言葉も、本来は意識の存否が明らかではないことを意味していたはずである。実際、近年の日本の脳蘇生研究では、植物状態とはコミュニケーション障害にほかならないとする説が有力になっている。意識や感覚は備わっているが、それを声や表情や身振りであらわせないだけだという説である。(小松美彦「脳死」、『生命倫理とは何か』所収、市野川容孝編、平凡社)

精神(脳)と身体の二元論

私には、あの提案された死の定義の背後に、明らかな実用的動機とは別に、古くからの霊肉二元論の奇妙な亡霊がひそんでいるのが見える。それは、脳と肉体との二元論という新しいかたちをとって現れているのである。古くからの霊肉二元論と一定の類似性もちながら、脳と肉体とのこの二元論は、真の人格(Person)は脳のうちにある(ないしは脳によって代表される)のであり、肉体の残りの部分は脳のたんなる補助的な道具にすぎないと考える。それゆえ、脳が死んだ場合には、靈魂がでていってしまうのと同じことになる。つまり、残されるのは「遺骸」である。……脳以外の肉体の部分が人格の同一性(identity)において不可欠な役割をもつことを否定することは、かつての霊肉二元論が意識的靈魂を過大評価したのと同じように、脳という側面の過大評価である。脳がほかでもないこの肉体のかけがえのない脳であるのと同じように、肉体はほかでもないこの脳のかけがえのない肉体なのである。統御するものである(そして相互的には統御される)脳そのものがそうであるのと同様に、脳の中核的統御のもとにある肉体全体も、個別的であり、「私自身」であり、私の同一性に特有(指紋!)であり、かけがえのないものである。たとえ人格性の高度な諸機能は脳のうちに座をもつとしても、私の同一性は生命体全体との同一性である。さもなければ、どのようにして一人の男は一人の女を たんに彼女の脳をではなく 愛することができようか。さもなければ私たちは、どのようにして顔という側面に夢中になることができようか。容姿の繊細さに感銘を受けたりしようか。(ハンス・ヨナス「死の定義と再定義」、『バイオエシックスの基礎』所収、東海大学出版会)

「臓器貯蔵庫」としての脳死体(身体)

移植用臓器が摘出されるまで人工呼吸器を作動させておき、その摘出が終われば人工呼吸器のスイッチを切り、それから「遺体」の解剖を始める。……これだけなら別に悪いことでもないように思える。しかし、なぜそこで終わりになるといえるのか。なぜ呼吸器のスイッチを切るのか。取り扱っているのが死体だとひとたび確信してしまえば、人工的「活性化」を続行し、「死者」の肉体を生き生きとした臓器の貯蔵庫として、さらにはもしかすると、需要のあるホルモンやその他の生化学的化合物を製造するための工場として、いつでも使える状態にしておくということに反対する論理的な理由はなにもない(しかも、それに賛成する強力な実用的理由がある)。(略)

それだけではない。研究のためにそのような肉体を使用する、という可能性も忘れないようにしましょう。その従順な、被験者ならざる被験者に対して、もっともすばらしい外科的実験および移

植実験を、なぜなんの制限もなく行つてはならないのだろうか。免疫学的な研究、すなわち新旧いろいろな病気に感染させたり、薬品のテストをしたりすることはどうだろうか。私たちは、死を宣告された機能的有機体の積極的な協力をえるわけである。つまり、権利や利害のことを考慮しなければならぬということから生じる、研究にとつての不利な点なしに（死体は権利も利害ももたないから）、生きている提供者と同じ利点がえられる。（同論文）

三 「間」の出来事としての「死」

人間の出来事としての「死」

〔父、定道の発言 事故十日後〕

先生に、私どもの気持ちを尊重していただくのは、ありがたいことです。この九日間の娘の變化の中で、私は、最悪のことを覚悟しております。そしてその間に、私の先生方への信頼は、とても強くなっております。先生がこの子にしていただけ、最もいい治療をお考えください。私たちもそれに従います。

治療とは、ただ患者だけに向けられたものではないでしょう。その点、私どもの説教に似ております。この子の場合、この子を傷つけたことを心から後悔している母親がいます。先生の治療を、この母親に向けていただきたいのです。

先生は、「ケシの実の話」をご存知でしょうか。ある母親が、死んだわが子を抱いて釈迦のもとに行き、「この子の命を助けてほしい」と哀願しました。釈迦は、「それにはケシの実がいる。それは、死人を一度も出したことのない家の庭に育つたものでなくてはならない」と答えました。母親は何日もかかって懸命に探しましたが、そのようなケシは見つかからず、釈迦のもとに戻りました。しかしその時には、わが子の死を悟っていた。というものです。

先生にしていたきたいのは、その「ケシの実の医療」なのです。助かることはないでしょう。でも私たちは、最後まで望みを捨てきれないのです。そのような気持ちを察していただき、なんとか最高の治療を続けてください。そのことは、先生のこれからの臨床医としての考え方にも、大きな教訓になると信じております。

〔担当医、山口の回想 事故二十九日後〕

私は「……」「」臨終です」と告げた。即座にお二人は、「長い間ありがとうございました」とあいさつされた。

その後の遺体の清拭も、おかあさんは付きつきりで手伝われた。その表情には苦悩の色はみじんもなく、そばにいる看護婦と談笑するシーンも見られた。私は、「これでよかった。これしかなかった」という感慨にひたっていた。清拭が終わる頃、おかあさんの口もとから、

「ごめんね、有紀。でも、よくがんばったね。ありがとう」

という声が聞こえた。おかあさんの、有紀ちゃんへの最後のお別れのあいさつであった。

（小松美彦『死は共鳴する 脳死・臓器移植の深みへ』、勁草書房）

世代間の出来事としての「死」

たとえ、どんなにそれが小さかろうと、ぼくらが、自分たちの役割を認識したとき、初めてぼくらは、幸福になりうる。そのとき初めて、ぼくらは平和に生き、平和に死ぬことができる。なぜかというに、生命に意味を与えるものは、また死にも意味を与えるはずだから。

死というものは、それが正しい秩序の中にある場合、きわめてやさしいものだ。たとえば、プロヴァンスの老いたる農夫が、自分の世代の終わりに際して、自分の持ち分の山羊とオリブの木を、息子たちに与えて、彼らもまた彼らの順番に、彼らの息子たちに分け与えさせようとする、あのようなものだ。農夫の家系にあつては、人は半分しか死なぬ。各々の一生は、自分の番がくると、莢のように割れて、種を伝える。

ぼくは一度、母の臨終の床に侍した三人の農夫を身近に見たことがあった。もとよりそれは痛々しくはあった。二度目のへその緒が断ち切られるわけだった。一つの世代を他の世代につなぐ結び目が、二度目に解けるわけだった。この三人の息子たちは、いまや孤独の自分たちを見出したわけだった。これからは、何もかもみんな「自分で」学ばなければならぬ自分たち、お祭りの日に楽しく集まってつく食卓をなくしてしまった自分たち、頼りにしていた中心をなくしてしまつた自分たちに気づいて。ただぼくは、同時にこういう事実も発見した。この訣別によつて、生命もまた二度目に与えられるのだ、と。この息子たち、彼らもまた彼らの順番に先達となり、集合点となり、やがて長老となるのだと。彼らが彼らの順番に、いま中庭で遊んでるあの一団の子どもたちに、司令権を譲りわたすであろう、その時まで。

(中略)

もとより痛々しくはあるが、この家系のイメージ、道々一つずつ、白髪の美しい亡骸を見捨てては、なにか知られざる本然に向かつて進みゆくこの家系のイメージは、痛々しいには違いないが、同時にまた、きわめて純朴な美しさではないか。(サン・テグジュペリ『人間の土地』、新潮文庫)

死は、一回限りの個人の人生だけをみれば、喪失で終わる。(略)しかし、それらが個人の人生を超えて、次の誰かに引き継がれるならば、無駄ではなかったことになる。人生のサイクルを個人だけのものに閉じ込めないで、より大きい世代サイクル……のなかで考えると、死は、それに参画する人に何かを生むエネルギーとして引き継がれ、喪失から生成へ変換する力を生み出す。生きている者は、死にゆくものの遺産を受け継いで、失つたものに第二の生を与えようとするのである。(やまだようこ「死にゆく過程と人生の物語」、『生と死のケアを考える』所収、法蔵館)

自然物との間の出来事としての「死」

春、凍りついたベーリング海に、風と潮流の力により少しずつ亀裂が入ってゆく。その氷に囲まれた海をリードと呼ぶのだが、クジラ漁は、そのリードが大き過ぎても小さ過ぎても成り立たない。それどころか、氷は常に動き続け、目の前でリードそのものが消えてしまうことがある。つまり、さまざまな自然条件がうまく重なって、初めてエスキモーのクジラ漁が可能になるのである。それはおそらく、あらゆる狩猟に共通する宿命なのだろう。しかし、狩猟生活が内包する偶然性が人間に培うある種の精神世界がある。それは、人々の生かされているという想いである。

(星野道夫『長い旅の途上』、文春文庫)

私たちが生きてゆくということは、誰を犠牲にして自分自身が生きのびるかという、終わりのない日々の選択である。生命体の本質とは、他者を殺して食べることにあるからだ。近代社会の中では見えにくいその約束を、最もストレートに受けとめなければならないのが狩猟民である。

(中略)この世の掟であるその無言の悲しみに、もし私たちが耳をすますることができなければ、たとえ一生涯山を歩きまわろうとも、机の上で考え続けても、人間と自然との関わりを本当に理解することはできないのではないだろうか。人はその土地に生きる他者の生命を奪い、その血を自分の中にとり入れることで、より深く大地と連なることができる。そしてその行為をやめたとき、人の心はその自然から本質的に離れてゆくのかもしれない。(同書)